

## Cuttingへの親和性尺度の作成

立教大学心理教育相談所 浅野 瑞穂

### Development of an affinity scale to assess people who possess characteristics associated with self-harm (cutting)

Mizuho Asano (Psychological Educational Counseling Center of Rikkyo University)

This study aimed to develop an affinity scale to assess people who possess characteristics associated with self-harm (cutting). First, the characteristics of individuals who engage in self-harm (cutting) were identified through a review of blog reports, case studies, dissertations, and books. We subsequently classified these descriptions into groups, wrote original descriptions representing each group, and developed 63 items based on these descriptions. A survey was administered to university students to develop a hypothetical affinity scale for self-harm (cutting). Of the 63 items, 26 were selected for inclusion in the scale following factor analysis. Next, we tested the reliability and validity of this scale, and confirmed that it had sufficient reliability and certain concurrent validity. In the future, we will need to improve the scale's accuracy.

**Key words :** cutting, scale development, affinity.

### 問題と目的

近年、リストカットに関する書籍や記事がたびたび話題にのぼり、一般の人たちのあいだでも自傷行為への関心が高まっていると推測される。わが国では、近年、自傷行為の実態調査、事例研究、自傷行為を行う人の特徴や自傷行為と関連のある要因の検討など、自傷行為に関する研究が多く行われている。ここではまず、自傷行為についての先行研究をもとに、定義や特徴について述べる。

### 自傷行為の定義

本研究では、Walsh (2005 松本・山口・小林 訳 2007) と松本 (2009) の定義に基づき、研究の対象とする自傷行為を以下のように定義する。すなわち、自傷行為とは、「社会的に認められておらず、心理的苦痛を軽減する目的で行われる、

致死性の低い直接的な身体損傷であり、自殺を目的にしておらず、自分の意識を変化させることで間欠的・断続的な痛みを一時的にしのぎ、その瞬間を生き延びるために行われる行為である」と定義する。自傷行為を行う人は、最初は自殺の意図がなかったとしても、最終的に自殺につながる可能性があると考えられる (Owens, Horrocks, & House, 2002; 松本・阿瀬川・伊丹・竹島, 2008)。すなわち、自傷行為は死の問題と切り離すことはできず、臨床的に研究する価値のある問題であると言える。

### 自傷行為の要因と自傷行為を行う人の特徴

Walsh (2005 松本他訳 2007) によると、自傷行為に先行する要因としては、環境的要因、生物学的要因、感情的要因、行動上の要因、認知的要因の五つがある。環境的要因とは、重要な他者との関係の喪失、対人関係の葛藤、かなわぬ要求に対

する欲求不満などの、自傷行為を引き起こすことになる、個人の環境における様々な出来事や活動である。生物学的要因とは、大うつ病性障害、境界性パーソナリティ障害、双極性障害などの慢性的な医学的問題や体質的な脆弱性、緊急を要する身体的不調のことである。感情的要因は自傷行為の前に経験する感情のことであり、それには、恐れ、心配、恥ずかしさ、嫌悪感、不安・緊張などがあると考えられている。行動上の要因は、自傷行為を引き起こす行動のことであり、これには薬物やアルコールの乱用、過食などがある。認知的要因は、自傷行為を引き起こす思考もしくは信念のことであり、ストレスの認知などがこれにあたる。例えば、自傷行為を行う人は、起こった出来事に対して、自己・世界・未来についての訂正しがたい悲観的な考えを持ちやすい。例えば、学校で友人が笑っている場面を見ると、友人は自分のことを笑っており、自分の服や体重について嘲笑っているものだと思い自傷行為を行ったが、実際は友人の会話は本人とは何の関連もないものであった、ということがある。

次に、自傷行為を行う人の特徴について述べる。Klonsky & Muehlenkamp (2007) によると、性別では、男性よりも女性に自傷行為を行う人が多いという結果が出ている。しかし、主要な性差は、自傷行為の方法にあるのかもしれない。女性では自分の身体を切る Cutting が最も多い自傷の手段だが、男性では自分を燃やす、もしくは叩くという自傷を行いやすい傾向がある。また、自傷行為をしている人の心理学的な特徴としては、激しい否定的な感情を日常生活においてより経験しやすいこと、自分の経験した感情を意識することや表現することの困難があること、自己批判的で、激しい自己への怒りや嫌悪を経験しており、自己評価が低いことがある。

自傷行為として行われている行為では、自分の皮膚を切る Cutting、自分の身体を堅い物に打ち付けること、叩くこと、燃やすこと、が比較的共通した自傷行為の形態としてあげられる (Klonsky & Muehlenkamp, 2007)。そして、最も

多く行われていた自傷行為の形態は皮膚を切る Cutting であり、これは自傷行為を行っている人の 70% 以上が利用している手段であった (Martin et al., 2013)。様々な自傷行為の中で、Cutting が最も多く行われており、全体の半分以上を占めている行為であることは、自傷行為を行っている日本の大学生にもあてはまる (山口他, 2004)。

### 日本における自傷行為の研究

日本においては、近年、教育、医療、司法領域の実態調査に加えて、自傷行為の高さとそれに関連する心理学的特徴との関係を調査する研究が多く行われている (猪飼・大河原, 2013; 清瀧, 2008)。

これらの研究では、自傷行為の経験の頻度を自傷傾向として、他の変数との関連を統計学的に分析しているものが多い。また、近年は、自傷行為を行う人のアセスメントのために、自傷行為の際に用いる方法や、自傷行為と関連する特徴をその人がどのくらい持っているかを測定する質問紙を作成する研究が行われている。例えば、岡田 (2002) は、一般の大学生を対象として、自傷行為についての研究や、自傷経験者からのインタビューをもとに自傷行為を行っている頻度を調べる質問紙を作成し、その信頼性・妥当性について検討している。また、土居・三宅・園田 (2013) は、自傷行為を行う人に特有の心理社会的要因についての項目を集め、自傷行為が行われる傾向を測定する質問紙を作成し、信頼性と妥当性を検討した。

しかし、現在の日本の自傷行為に関する研究には問題点もあると考えられる。第一に、日本の自傷行為の研究は、自傷行為を行っている頻度と他の要因との関連を統計学的に検討している研究が多い。しかし、尺度が調査対象とする自傷行為の定義が一定でないために、どのような行為を自傷行為として測定しているかが曖昧であるという問題点がある。

第二に、日本の非臨床群を対象とした自傷行為の研究で使用されている質問紙は、そのほとんどが自傷行為についての直接的な表現を使用した、

行動面についてのものである（猪飼・大河原, 2013；清瀧, 2008）。この質問紙には、研究協力者がどのくらいの頻度でどのような自傷行為を行っているのかを正確に知ることができるという長所がある。しかし、これらの研究では、自傷行為の心理社会的側面には着目しておらず、自傷行為について直接的に表現する項目を使用しているため、研究協力者に対する侵襲性が高く、正確な回答が得られない場合も想定される。

第三に、日本における自傷行為の研究では、非臨床群を対象として、様々な自傷行為をどのくらいの頻度で行っているかを尋ねて自傷傾向とし、他の要因との関連を検討する研究が多い。しかし、非臨床群に自傷行為に関する調査を行った場合、自傷行為を経験している人は少なく、自傷傾向を算出できる研究協力者も少なくなる。つまり、自傷行為の頻度だけでは、非臨床群における自傷行為を実際には行っていないが行う可能性があるという意味での自傷傾向を捉えることはできない。

## 本研究の目的

従って、先行研究の問題点を改善するためには、対象とする自傷行為を明確に定義し、行動面に加えて、自傷行為を行っている人に特有の心理社会的特徴についての尺度を作成することが有効であると考えられる。このような尺度であれば、自傷行為を一つの行為に限定できる。また、心理社会的特徴についての尺度であれば、行動面についての侵襲性も抑えられ、可能性としての自傷傾向を捉えることも可能であると考えられる。

先行研究によると、最も多く行われていた自傷行為の形態はCuttingであり、自傷行為を行っている人の70%以上が利用している手段であること（Martin et al., 2013）、日本においても、様々な自傷行為の中で、Cuttingが最も多く行われており、全体の半分以上を占めている行為であること（山口他, 2004）から、本研究では、尺度の調査対象とする自傷行為をCuttingに限定する。そして、本研究におけるCuttingを、「自殺以外の目的から、故意に自分の身体を切ること」と定義する。した

がって作成する尺度名は、「Cuttingへの親和性尺度」とする。Cuttingへの親和性とは、「研究協力者が、Cuttingを行っている人に特有の心理社会的特徴をどのくらい持っているか」と定義する。Cuttingへの親和性が高い人は、Cuttingを行う人に特有の心理社会的特徴を多く持っており、Cuttingを行う可能性が高いだろうと予測する。Cuttingを行う人に特有の心理社会的特徴とは、Cuttingを行っている人の感情や、対人関係をはじめとする外界との関わりのことである。

よって本研究では、第一研究において、Cuttingへの親和性尺度の項目を作成し項目を選別する過程で因子分析を行い、Cuttingを行っている人に特有の心理社会的特徴を明らかにすることを目的とする。また、第二研究において、Cuttingへの親和性尺度の項目を作成して選別し、信頼性と妥当性の検討を行うことを目的とする。

## 第一研究

### 目的

第一研究では、尺度を構成する質問項目を収集し、Cuttingへの親和性尺度を作成することが目的である。また、Cuttingへの親和性尺度の項目を選別する過程で因子分析を行い、Cuttingを行っている人に特有の心理社会的特徴を明らかにすることも目的とする。

### 方法

**質問項目の収集の手順** 尺度の質問項目を作成するにあたり、筆者は、Cuttingを行っている人の書いたブログ、Cuttingを行っている人の事例研究、Cuttingについての論文・書籍から、Cuttingを行っている人の心理や人間関係に関する特徴についての記述を集める方法を選択した。これは、Cuttingを行っている人の心理社会的特徴についての記述を幅広く集めるために適していると考えたためである。

はじめに、Cuttingについての記事を書いてい

るインターネット上のブログ記事，Cuttingを行っている人の事例研究，Cuttingに関する論文・書籍から，Cuttingを行っている人の感情，感覚，Cuttingの目的，理由など，Cuttingを行っている人に特有と考えられる部分を文章として抜き出した。参考にしたブログの数は10，事例研究の数

は30，論文・書籍の数は38である。項目作成の資料として使用した事例研究，論文・書籍は付録としてまとめた。

抜き出した記述は全部で704個であった。次に，抜き出した文章を一つずつカードにした。カードの数が多かったため，分類は，インターネット上

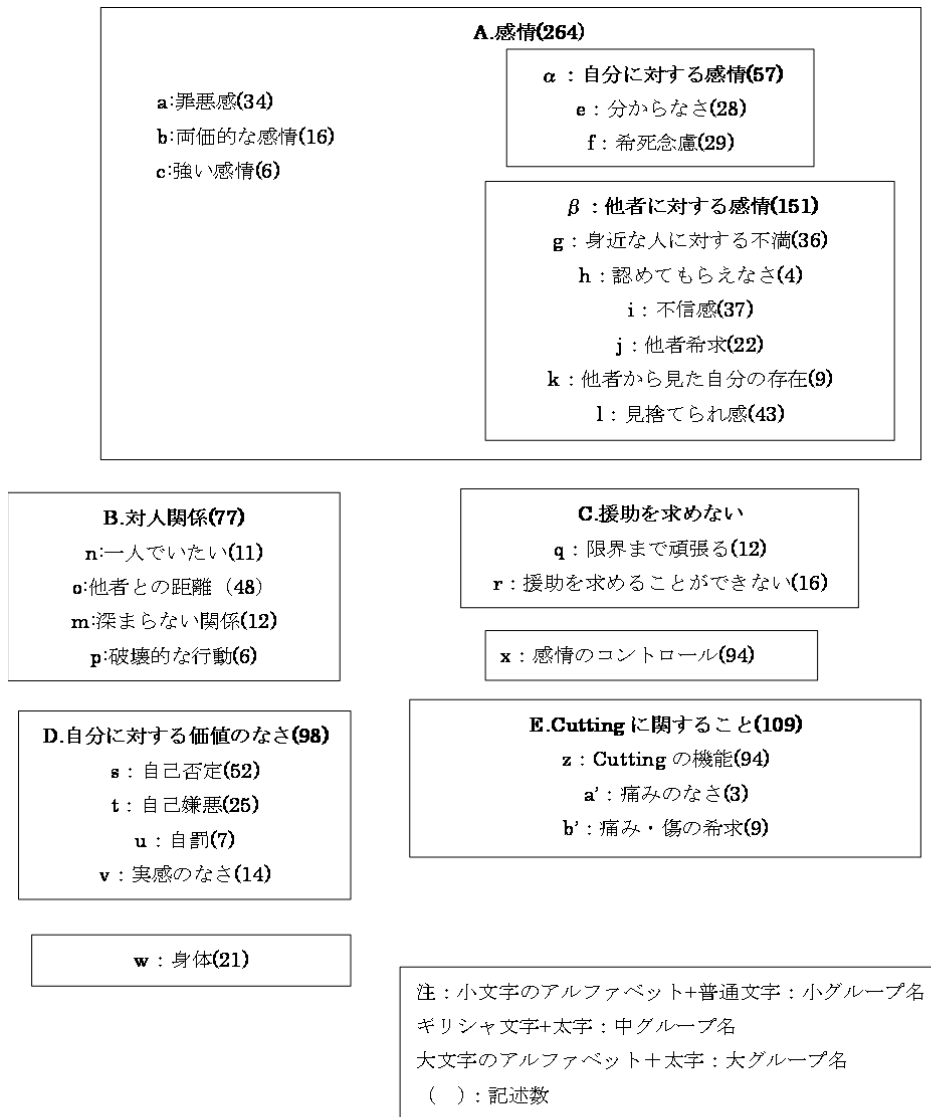


Figure 1 ブログ・事例研究・論文・書籍から抽出した Cutting に関する記述をまとめた全体マップ

のブログ記事が基になっているカード、事例研究が基になっているカード、論文・書籍が基になっているカードごとに分類した。それらを、KJ法の手順や林（1988）の探索的データ分析の手順を参考にしてグループに分類した。初めにカードを小グループごとにまとめ、それをさらに中グループ、大グループの順にまとめた。まとめられないものは他のものとまとめずに、そのままのグループとして残した。小グループは全部で26個であり、「罪悪感」、「両面的な感情」、「強い感情」、「分からなさ」、「希死念慮」、「身近な人に対する不満」、「認めてもらえなさ」、「不信任感」、「他者希求」、「他者から見た自分の存在」、「見捨てられ感」、「一人でいたい」、「他者との距離」、「深まらない関係」、「破壊的な行動」、「自己否定」、「自己嫌悪」、「自罰」、「実感のなさ」、「身体」、「限界まで頑張る」、「援助を求めることができない」、「感情のコントロール」、「Cuttingの機能」、「痛みのなさ」、「痛み・傷の希求」であった。中グループは全部で2個であり、その内容は「自分に対する感情」、「他者に対する感情」であった。大グループは全部で5個であり、その内容は「感情」、「対人関係」、「援助を求めない」、「自分に対する価値のなさ」、「Cuttingに関すること」であった。筆者が分類を行ったものを、他の数人の大学院生と臨床心理士である指導教員と共に検討し、必要に応じてもとの資料を確認し、分類を修正した。カードの分類の結果完成したグループは、ブログ、事例研究、論文・書籍の全てを合わせた全体のマップとして示した(Figure 1)。

次に、全てのグループから、筆者がグループの内容を代表していると考えたカードの内容を質問項目として文章を作成した。基本的には各グループから二つの質問項目を作成するようにしたが、グループによっては三つ以上の項目を抽出したグループもある。すなわち、二つの項目ではそのグループの内容を表し切れなかった場合には、三つ以上の内容を質問項目として採用した。

作成した質問項目を数人の大学院生と臨床心理士である指導教員と共に、回答のしやすさと倫理

的配慮の観点から、質問項目の文章について検討した。その後、筆者が質問項目を再度修正した。この検討と修正の作業を数回繰り返した。その結果作成した質問項目は、Cuttingを行っているクライアントの治療経験がある2名の臨床心理士（臨床経験13年、28年）により、Cuttingを行う人に見られる特徴かどうか、侵襲性は高いかという点をさらに明確にするために検討された。作成した項目を筆者が2名の臨床心理士の元に紙媒体で持って行き、口頭で検討した。検討の結果、2名の臨床心理士から出された意見を臨床心理士である指導教員と相談しながら項目を修正し、第一研究で使用する質問項目を決定した。質問項目は、Excelで乱数を発生させ、ランダムに並び替えて質問紙を作成した。作成された項目は74項目である。逆転項目は、そのうちの9項目であった。

なお、74項目のうち、Eの「Cuttingに関すること」のグループからの11項目は本研究には使用しなかった。質問項目の検討を依頼した2名の臨床心理士から、Eの項目はCuttingの経験がある人に回答してもらった方が意味があるとの指摘を受けたためである。そこで、これらの項目は、今後必要だと考えられるCuttingの経験の有無を尋ねる調査で使用する尺度の項目として、Cuttingの経験があると答えた人のみに回答を求める項目とした。本研究の尺度に使用したのは、E:「Cuttingに関すること」を除いた63項目である。本研究で使った63項目はTable 1とTable 2に示した。

**研究協力者と調査時期** 第一研究の研究協力者は、関東地方の二つの私立4年生大学の学生で、集団法によって質問紙調査を実施した。研究協力者は、男性が161名で18～41歳、平均年齢19.7歳 ( $SD = 3.03$ )、女性が361名で18～26歳、平均年齢19.1歳 ( $SD = 1.35$ ) であり、合計522名、平均年齢19.3歳 ( $SD = 2.04$ ) であった。大学で行われている複数の授業で質問紙を配布し、回収を行った。これらの全てを分析対象とした。調査時期は、2014年5月～6月であった。

**調査内容** 1.フェイスシート：フェイスシート



Table 1 Cutting に関する質問項目①

---

1. 人が心配してくれると申し訳ない気持ちになる
2. 身近な人にとって、自分は迷惑な存在だと思う
3. 身近な人がつらい目にあうのは自分のせいだと思う
4. 良好な人間関係の中でも常に罪悪感がある
5. 身近な人に対して、好きだという気持ちと、憎らしいという気持ちの両方がある
6. 身近な人に対しては、甘えたい気持ちがあるが甘えられない
7. 自分の感情の強さにとまどうことがある
8. 不安感や恐怖感は永久に続き、逃れられないと思う
9. 自分の感情が分からない
10. 自分が何のために生きているのか分からないことがある
11. 困難な状況の中では、どうしたらいいか分からない
12. 消えてしまいたいと思うことがある
13. \*自分は存在していてよいと思える
14. 元気でいると、身近な人に放っておかれると思う
15. 身近な人の機嫌に、いつも振り回されている
16. 身近な人から色々なことを押し付けられていると感じることがある
17. 身近な人が本当の自分を知ったら、自分のことを嫌いになると思う
18. 身近な人は、自分のことを何も知らないと思う
19. 自分のことは、人には話したくない
20. \*人を信頼することができる
21. 人に心を開くことはない
22. 誰かに気にかけてもらいたい
23. 誰かに、自分の苦しみ気付いてほしい
24. 自分のつらい気持ちや苦しさを、誰かに理解して欲しい
25. \*人に多くは望まない
26. 生きていることを嫌っている自分が気に入っている
27. 周囲に対して、自分が危ない人物だとアピールしたい
28. 人から見捨てられるのではないかと不安である
29. 人の言葉を重く受け止めて傷つくことがある
30. 人は必ず自分を見捨てるだろう
31. \*自分は、人から愛されたり世話をされたりするのにふさわしい人間だと思う
32. 身近な人に対して何となく遠慮する
33. \*身近な人との間では、親密な関係が築けていると思う

---

※\*は逆転項目

Table 2 Cutting に関する質問項目②

---

34. 人間関係を全て断ち切って一人になりたい
35. \*一人でいるよりも人と一緒にいたい
36. 身近な人を心配させるようなことをする
37. 身近な人を独占したい
38. 身近な人との情緒的な触れ合いを避けている
39. 見捨てられるのではないかとと思うと、相手と距離をとる
40. わざと自分の不利になるように行動することがある
41. 身近な人に対して、疑いの気持ちを持つことがある
42. 頑張りすぎた結果、全てが嫌になることがある
43. イライラして我慢の限界だと思うことがある
44. \*困ったときに相談をすることができる人がいる
45. 自分が人の前で弱みを見せることは許せない
46. \*自分にもそれなりの長所や才能があると思う
47. 人からほめられても、それを素直に受け入れることができない
48. 自分は幸せになるとは思えない
49. 自分で自分のことを気持ちが悪いと思うことがある
50. 自分自身が自分の人生を駄目になっていると思う
51. 自分は悪い人間だと思う
52. 自分は罰を受けるべきだと思うことがある
53. 自分を罰したいと思う
54. つらいできごとがあっても、何の感情もわかない
55. 自分のことでも実感がなく、他人事のように感じる
56. 心と身体がバラバラだと感じる
57. 鏡で見る自分の姿をみにくいと思うことがある
58. 自分の身体はグロテスクであると感じる
59. 自分の身体が大嫌いだ
60. 行動や衝動を自分でコントロールすることができない
61. 自分の感情をコントロールすることが苦手である
62. ある行動をやめたくてもやめられないことがある
63. \*自分の感情がかなり強い場合でもコントロールできる

---

※\*は逆転項目

Table 3 第一研究の Cutting への親和性尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	理解・ 受容希求	自己否定感	他者不信	自己統制 困難
Q26 誰かに、自分の苦しみに気付いて欲しい	.84	0.0	-.02	-.07
Q43 誰かに気にかけてもらいたい	.84	.00	-.14	-.13
Q4 自分のつらい気持ちや苦しさを、誰かに理解して欲しい	.80	-.08	-.21	-.01
Q18 身近な人を独占したい	.54	.06	-.15	.06
Q29 人から見捨てられるのではないかと不安である	.53	.13	.14	.12
Q23 人の言葉を重く受け止めて傷つくことがある	.49	-.18	.21	.23
Q28 頑張りすぎた結果、全てが嫌になることがある	.43	.00	.32	.02
* Q47 自分は存在していてよいと思える	.00	-.81	.09	.14
Q49 人は必ず自分を見捨てるだろう	.02	.68	.04	.01
Q54 身近な人にとって、自分は迷惑な存在だと思う	.09	.62	.02	.14
* Q61 身近な人との間では、親密な関係が築けていると思う	.11	-.61	.01	.07
* Q16 自分にもそれなりの長所や才能があると思う	.15	-.53	.07	-.01
Q39 身近な人がつらい目にあうのは自分のせいだと思う	.17	.45	.03	-.03
Q52 良好な人間関係の中でも常に罪悪感がある	.11	.40	.26	.09
Q48 心と身体がバラバラだと感じる	.05	.38	.06	.07
Q1 自分のことは、人には話したくない	-.16	-.04	.79	-.09
Q37 自分が人の前で弱みを見せることは許せない	-.10	-.07	.64	-.05
Q22 身近な人に対して何となく遠慮する	.24	-.05	.57	-.07
Q5 人に心を開くことはない	-.14	.28	.56	-.13
Q60 人が心配してくれると申し訳ない気持ちになる	-.04	-.02	.47	.11
Q63 人からほめられても、それを素直に受け入れることができない	-.14	.09	.44	.21
Q13 行動や衝動を自分でコントロールすることができない	-.11	.00	-.17	.96
Q34 自分の感情をコントロールすることが苦手である	.01	.09	-.08	.67
Q10 ある行動をやめたくてもやめられないことがある	.00	-.11	.05	.54
Q2 自分の感情の強さにとまどうことがある	.08	-.15	.24	.44
Q12 自分自身が自分の人生を駄目にしていると思う	.04	.27	-.02	.42

※ \* は逆転項目。

因子間相関	理解・受容希求	自己否定感	他者不信	自己統制困難
		.30	.27	.57
			.61	.58
				.48

では、研究協力者の性別と年齢を尋ねた。2.Cutting への親和性尺度 (仮尺度) : Cutting への親和性尺度を作成するにあたり、項目を選別するために、筆者が作成した仮尺度としての Cutting への親和性尺度を用いた。本尺度は、「6 : よくあてはまる」「5 : あてはまる」「4 : ややあてはまる」「3 : あまりあてはまらない」「2 : あてはまらない」「1 : 全くあてはまらない」の6件法で回答を求めた。フェイスシート以外の質問項目数は全63項目であった。

## 結果と考察

**尺度項目の選別** はじめに、Cutting への親和性尺度の得点が高い群と低い群で項目ごとに差が見られるかを検討するために、研究協力者を Cutting への親和性尺度の得点が上位 25 % に入る群 (上位群) と下位 25 % に入る群 (下位群) に分けた。そして、尺度の項目ごとに上位群と下位群で  $t$  検定を行った。その結果、63 項目全てで上位群と下位群の差が 1 % 水準で有意であった。これにより、全ての項目で上位群と下位群の差があるこ

とが示されたので、その後の分析では63項目全てを使用した。

次に、天井効果とフロア効果の見られる項目を確認した。天井効果が見られた項目はなかった。フロア効果の見られた5項目（尺度の項目番号15, 41, 44, 45, 46）を削除した。

次に、尺度の因子構造を決定するために、主因子法・Promax回転による探索的因子分析を行った。因子分析では、因子負荷量が.35に満たない項目や、二つ以上の因子に.35以上の因子負荷量を示していた32項目を削除した。最終的に4因子が抽出され、項目数は全部で26項目になった。Promax回転後の項目と因子間相関はTable 3に示した。

抽出された4因子は次のように命名した。第一因子は、「誰かに自分の苦しみに気付いて欲しい」「誰かに気にかけてもらいたい」「自分のつらい気持ちや苦しさを、誰かに理解して欲しい」など、誰かに自分の気持ちを理解して欲しいことに関する項目と、「身近な人を独占したい」「人から見捨てられるのではないかと不安である」など、誰かに理解されたいことや自分の存在を受容されたいこと、受容されないことに対する不安に関する項目から構成されているので、「理解・受容希求」因子と命名した。

第二因子は、「人は必ず自分を見捨てるだろう」「身近な人にとって、自分は迷惑な存在だと思う」「身近な人がつらい目にあうのは自分のせいだと思う」など、自分の存在を強く意識していることを表す項目と、「自分は存在していてもよいと思える（逆転項目）」「身近な人との間では、親密な関係が築けていると思う（逆転項目）」「心と身体がバラバラであると感じる」など、自分はいなくなってもいい存在である、自分の存在感を希薄にしか感じられないといったことを表す項目で構成されているが、いずれも自分を否定的な存在として捉えていることに関する項目であることから、「自己否定感」因子と命名した。

第三因子は、「自分のことは人に話したくない」「自分が人の前で弱みを見せることは許せない」

「人に心を開くことはない」など、人に自分のことを知られたくない気持ちを表す項目と、「人が心配してくれると申し訳ない気持ちになる」「人からほめられてもそれを素直に受け入れることができない」という、人からの心配やほめ言葉を受け入れられないことを表す項目から構成されており、他者に不信感を持っていることを表していると考えられたので、「他者不信」因子と命名した。第四因子は、「行動や衝動を自分でコントロールすることができない」「自分の感情をコントロールすることが苦手である」など、自分の衝動・行動・感情をコントロールできないことを表す項目から構成されているので、「自己統制困難」因子と命名した。

次に、内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を算出したところ、Cuttingへの親和性尺度全体で $\alpha = .89$ 、「理解・受容希求」因子で $\alpha = .84$ 、「自己否定感」因子で $\alpha = .82$ 、「他者不信」因子で $\alpha = .75$ 、「自己統制困難」因子で $\alpha = .75$ であった。

第一研究では、Cuttingへの親和性尺度を構成する項目を選別し、因子分析を行った。また、 $\alpha$ 係数も、全ての因子と尺度全体で.70以上だったことから、十分な内的整合性が確認され、尺度の信頼性が確認された。

## 第二研究

### 目的

第二研究では、最終的なCuttingの親和性尺度を確定するために、第一研究で選定したCuttingの親和性尺度の項目に再度因子分析を行って因子構造を明らかにするとともに、尺度の妥当性と信頼性を検討することを目的とした。

### 方法

再検査信頼性検討のため、同じ協力者に対して質問紙調査を2回行った。1回目の調査は、Cuttingへの親和性尺度の信頼性・妥当性の検討する



目的で行われた。2回目の調査は、1回目の調査から約1か月後に、Cuttingへの親和性尺度の再検査信頼性を検討するために行われた。

**研究協力者と調査時期** 1回目調査の研究協力者は男性191名（18～35歳，平均年齢20.2歳， $SD = 1.74$ ），女性207名（18～23歳，平均年齢19.7歳， $SD = 1.05$ ），の合計398名（18歳～35歳，平均年齢20.0歳， $SD = 1.44$ ），であった。2回目の調査の研究協力者は，質問紙を回収した人のうち，1回目の調査に回答していた男性107名（18～35歳，平均年齢20.3歳， $SD = 1.98$ ），女性141名（18～23歳，平均年齢19.7歳， $SD = .99$ ），の合計248名（18歳～35歳，平均年齢20.0歳， $SD = 1.52$ ），であった。

1回目の調査は2014年10月，2回目の調査は2014年11月に行った。2回の調査は約1ヵ月の期間をおいて行われた。

**調査内容** 1回目の調査の調査内容は次の通りである。1. フェイスシート フェイスシートは性別，年齢，および生年の下2ケタ，生まれた日の下2ケタ，学生番号の下2ケタからなるIDを記入してもらった。2. Cuttingへの親和性尺度，Cuttingへの親和性尺度は，「6：よくあてはまる」「5：あてはまる」「4：ややあてはまる」「3：あまりあてはまらない」「2：あてはまらない」「1：全くあてはまらない」の6件法で回答を求めた。項目数は全部で26項目であった。3. 自傷行為尺度（土居他，2013），土居他（2013）の自傷行為尺度は，「1：まったく違う」「2：やや違う」「3：ほぼその通り」「4：まったくその通り」の4件法で，項目数は全20項目であった。

2回目の調査の調査内容は次の通りである。1. フェイスシート 2. Cuttingへの親和性尺度 フェイスシートの記入内容は1回目の調査と同様である。Cuttingへの親和性尺度も1回目の調査と同様のものを使用した。

## 結果

**Cuttingへの親和性尺度** 第一研究で選定したCuttingへの親和性尺度項目について，主因子法・

Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子負荷量と因子間相関をTable 4に示した。その際，因子負荷量が.35に満たなかった2項目を削除した。なお，天井効果とフロア効果のある項目は見られなかった。最終的に，4因子，24項目が抽出された。抽出された因子は因子を構成する項目に変更はあったが，因子を構成する項目の内容を踏まえても因子名を変更する必要はないと判断し，第一研究と同様に命名した。次に， $\alpha$ 係数を算出したところ，Cuttingへの親和性尺度全体で $\alpha = .89$ 「自己否定感」因子で $\alpha = .85$ ，「理解・受容希求」因子で $\alpha = .81$ ，「他者不信」因子で $\alpha = .75$ ，「自己統制困難」因子で $\alpha = .72$ ，であった。

**自傷行為尺度** 自傷行為尺度について，主因子法・Promax回転による因子分析を行った。はじめに，天井効果が見られた1項目を削除した。次にフロア効果が見られた8項目を削除した。次に，因子負荷量が.35に満たなかった2項目を削除した。残りの9項目で因子分析を行った結果，最終的に2因子が抽出され，2因子構造を採用した。抽出された因子は土居他（2013）で抽出された「自責思考」因子と「承認欲求」因子と項目内容が同じであった。よって，因子名は土居他（2013）と同様に命名した。次に， $\alpha$ 係数を算出したところ，自傷行為尺度全体で $\alpha = .60$ ，「自責思考」因子で $\alpha = .73$ ，「承認欲求」因子で $\alpha = .48$ ，であった。「自責思考」因子にはある程度の内的整合性が確認できたが，承認欲求因子は， $\alpha$ 係数の値が.6に満たず，因子の内的整合性に疑問が残るため，今後の分析には使用しなかった。

**Cuttingへの親和性の性差の検討** 次に，Cuttingへの親和性尺度の記述統計量を示す。因子分析の結果から，4因子を構成する全24項目の合計得点をCuttingへの親和性の高さとした。合計得点の全体の平均値は80.1（ $SD = 16.35$ ）で，最大値が129，最小値が31であった。Cuttingへの親和性の高さに性差が見られるかを検討するために $t$ 検定を行ったところ，性別による有意差が見られ，女性の方が男性よりも高かった（ $t(396) =$

Table 4 第二研究の Cutting への親和性尺度の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン)

項目名	自己否定感	理解・受容希求	他者不信	自己統制困難
* Q3 自分は存在していてよいと思える	-.81	.09	.03	.08
Q22 身近な人にとって、自分は迷惑な存在だと思う	.79	-.05	-.01	.07
* Q9 自分にもそれなりの長所や才能があると思う	-.78	.06	.16	.15
Q11 自分が自分自身の人生を駄目にしていると思う	.62	.04	.04	.09
Q6 人は必ず自分を見捨ててだろう	.53	-.05	.13	.13
Q20 人から見捨てられるのではないかと不安である	.50	.30	.04	.07
Q7 身近な人がつらい目にあうのは自分のせいだと思う	.43	.13	.00	.06
Q21 人が心配してくれると申し訳ない気持ちになる	.40	-.01	.25	-.04
* Q8 身近な人との間では、親密な関係が築けていると思う	-.39	.07	-.21	.17
Q10 良好な人間関係の中でも常に罪悪感がある	.37	.15	.20	.07
Q12 自分のつらい気持ちや苦しさを、誰かに理解して欲しい	.03	.92	-.05	-.07
Q4 誰かに、自分の苦しみに気付いてほしい	-.12	.89	.06	-.07
Q16 誰かに気にかけてもらいたい	-.03	.68	-.12	.06
Q5 人の言葉を重く受け止めて傷つくことがある	.05	.38	.19	.09
Q26 自分のことは、人には話したくない	-.02	-.08	.77	-.06
Q24 自分が人の前で弱みを見せることは許せない	-.21	.01	.76	.01
Q15 人に心を開くことはない	.11	-.09	.59	.04
Q25 頑張りすぎた結果、全てが嫌になることがある	.04	.12	.45	.14
Q19 身近な人に対して何となく遠慮する	.32	.08	.38	-.12
Q17 行動や衝動を自分でコントロールすることができない	.07	-.03	-.03	.74
Q2 自分の感情の強さにとまどうことがある	-.23	.00	.07	.70
Q23 自分の感情をコントロールすることが苦手である	.15	-.14	.05	.63
Q1 ある行動をやめたくてもやめられないことがある	-.05	.06	-.09	.48
Q13 身近な人を独占したい	-.03	.34	-.10	.39

※ \* は逆転項目。

因子相関	自己否定感	理解・受容希求	他者不信	自己統制困難
		.43	.64	.55
			.31	.58
				.39

2.37,  $p < .05$ )。

Cutting への親和性に性差があったため、各因子得点においても男性と女性で性差が見られるかを検討するため、 $t$  検定を行ったところ、理解・受容希求因子で男性と女性で有意な差が見られた ( $t(396) = 4.09$ ,  $p < .001$ )。また、自己統制困難因子で、男性と女性で有意な差が見られた ( $t(396) = 2.74$ ,  $p < .01$ )。理解・受容希求と自己統制困難のいずれにおいても、女性の方が男性より平均値が高かった。自己否定感因子と他者不信因子の得点には、性差は見られなかった (自己否定感:  $t(396) = .99$ ,  $n.s.$ , 他者不信:  $t(396) = .57$ ,

 $n.s.$ )。

Cutting への親和性尺度の併存的妥当性 次に、Cutting への親和性尺度の併存的妥当性を検討するため、自傷行為が行われる傾向を測定する尺度である自傷行為尺度とのピアソンの積率相関係数を算出した。本研究では、自傷行為尺度は2因子構造であった。承認欲求因子は、 $\alpha$  係数の値が.6に満たず、因子の内的整合性に疑問が残るため、分析には使用せず、自責思考因子のみを分析に使用した。研究協力者全体の自責思考の平均値は12.8 ( $SD = 3.00$ ) であった。Cutting への親和性尺度の全体得点・各下位尺度得点と自責思考の得

点との相関係数は、Cuttingへの親和性尺度全体と自責思考で.62, 自己否定感と自責思考で.69, 理解・受容希求と自責思考で.33, 他者不信と自責思考で.41, 自己統制困難と自責思考で.29であり, いずれも0.1%水準で有意であった。この結果はTable 5に示した。

**Table 5 Cutting への親和性尺度全体・Cutting への親和性尺度の各下位尺度と自責思考因子との相関係数 (r)**

	自責思考
Cutting への親和性尺度全体	.62***
自己否定感	.69***
理解・受容希求	.33***
他者不信	.41***
自己統制困難	.29***

※ \*\*\* は 0.1% 水準で有意 (両側) であることを示す

**Cutting への親和性尺度の再検査信頼性** 次に, Cutting への親和性尺度の再検査信頼性の検討するため, 1 回目の調査と 2 回目の調査の相関係数を算出した。1 回目の調査と 2 回目の調査の相関係数は, Cutting への親和性尺度全体で.86, 自己否定感で.84, 理解・受容希求で.79, 他者不信で.77, 自己統制困難因子で.77であった。これらはいずれも 0.1% 水準で有意であった。

## 考察

本研究では, Cutting への親和性尺度における十分な内的整合性と再検査信頼性が確認された。

次に Cutting への親和性尺度の併存的妥当性について述べる。自傷行為尺度は, 本研究での併存的妥当性の検討のために新たに構成した。自責思考因子にはある程度の内的整合性が確認できたが, 承認欲求因子は,  $\alpha$  係数の値が.6に満たず, 因子の内的整合性に疑問が残るため, 分析には使用しなかった。

Cutting への親和性尺度全体と, 自己否定感で自責思考と高い正の相関が見られたこと, 他者不信と自責思考の間に中程度の正の相関が見られたことは, Cutting への親和性, 自己否定感, 他者

不信が自傷行為を行う傾向を測定する質問紙である自傷行為尺度の自責思考因子の内容と関連があることを示している。自責思考因子は, 自分を責める考えについての質問項目から成り立っており, 自己否定感の質問項目の内容と関連していることが予測される。他者不信は, 他者に対する不信感を持っていることを表す概念であり, 自分を責める考えについての質問項目である自責思考と必ずしも同じ内容の質問項目ではないので, 自責思考との相関が中程度にとどまったと考えられる。一方, 理解・受容希求, 自己統制困難は, 自責思考とは異なった内容を測定していると考えられる。そのため, 自責思考との相関は弱いものになったのだろう。これらの結果から, Cutting への親和性尺度は, 自傷行為尺度よりも多様な側面を捉えている可能性が考えられる。以上の結果により, 本研究では, Cutting への親和性尺度の十分な信頼性と一定の併存的妥当性が示された。

また, Cutting への親和性の高さには性差があり, 男性よりも女性の方が高かった。女性では特に理解・受容希求と自己統制困難が男性よりも高かったことから, Cutting への親和性が高い女性に対して援助を行っていく場合には, 他者から理解されたい気持ちや, 自分を統制することの困難を理解することが重要であると考えられる。

## 総合考察

本研究の尺度から, 自己否定感, 理解・受容希求, 他者不信, 自己制御困難, の4因子が抽出された。これらは, 自傷行為を行う人の特徴とも一致している。例えば, Klonsky & Muehlenkamp (2007) によると, 自傷行為をしている人の心理学的な特徴として, 激しい否定的な感情を日常生活においてより経験しやすいこと, 自己批判的で, 激しい自己への怒りや嫌悪を経験しており, 自己評価が低いことがある。これは, 本研究の自己否定感因子の特徴と一致する。また, Walsh & Rosen (1998 松本・山口訳 2005) や清瀧 (2008)

によると、自傷行為を行う人は、外界に対する不信任感が強く、対人関係が不安定であると言われており、これは、本研究の他者不信因子の内容と一致する。Hawton, Rodham, & Evans (2006 松本他訳 2008) によると、若年女性では、衝動性と自傷行為との間に密接な関連が見られており、これは本研究の自己統制困難因子と一致する。自己統制困難因子については、女性の方が高い得点を示しており ( $t(396) = 2.74, p < .01$ )、女性に多く見られる特徴と言えるかもしれない。理解・受容希求因子については、尺度作成に使用した事例研究やブログに記載されている当事者の記述の内容と近いものだった。Cutting には性差 (Klonsky & Muehlenkamp, 2007) や年齢差 (山口他, 2004) もあると考えられるので、これらの4因子で、Cuttingを行う人の心理社会的特徴の全てが網羅できたとは言えないが、今回調査対象とした大学生の年齢にあたる20代前後の年齢層の特徴は示していると考えられる。

また、本研究では、自傷行為の心理社会的特徴に着目して調査対象とする自傷行為を明確にした上で、尺度項目を作成、選別することにより、侵襲性が比較的低いCuttingへの親和性尺度を構成した。基準関連妥当性や、併存的妥当性の検討をさらに行えば、本尺度を使用することにより、Cuttingを行う危険性が高い人をアセスメントし、専門的な援助につなげやすくできると考えられる。また、Cuttingの開始年齢は、先行研究では13, 14歳であり、日本では中学生にあたる (山口他, 2004)。そして、Cuttingを経験している人の半分以上が10回以上のCuttingを行っている (山口他, 2004)。したがって、特にCuttingの開始年齢にあたる中学校での支援がCuttingを予防することおよび、重症化させないために重要であると考えられる。具体的には、Hawton, et al. (2006 松本他訳 2008) で行われていたような、Cuttingや自傷行為を行う理由についての正しい情報を与える心理教育や、Cuttingで悩んでいる場合、どこへ相談したらいいかを中学生に伝える時間を設けることなどが考えられるだろう。

最後に本研究の課題について述べる。本研究では、尺度の併存的妥当性の確認を行ったが、本研究で使用した自傷行為尺度では、Cuttingへの親和性尺度の4因子全ての妥当性を測定できたとは言えなかった。したがって、本尺度の併存的妥当性を確認するために、4因子それぞれと同じ概念を測定している測度との関連を見る方法で併存的妥当性の検討が必要である。また、Cuttingを行っている人とCuttingを行っていない人の得点の違いを算出し、基準関連妥当性等の検討を行うことが望まれる。また、作成した尺度を用いて自傷行為と関連する心理学的特徴との関係の調査を行うことが必要である。それらが今後行われていくことによって、本研究で作成した尺度をより精度の高いものにすることができるだろう。

## 謝 辞

本研究は、筆者が立教大学現代心理学研究科臨床心理学専攻 2014年度修士論文として提出したものを加筆・修正したものです。本研究におきまして、調査にご協力いただいた研究協力者の皆様に深く感謝申し上げます。また、本論文の執筆にあたって、様々なご助言をくださり、研究協力の時間を確保してくださった諸先生方に深く感謝申し上げます。最後に、本研究に関して終始ご指導ご鞭撻をいただきました本学の林もも子教授に心から御礼申し上げます。

## 引用文献

- 土居正人・三宅俊治・園田順一 (2013). 自傷行為尺度作成の試みとその検討 心身医学, **53**, 112-1119.
- 猪飼さやか・大河原美以 (2013). 母からの負情動・身体感覚否定経験が自傷行為に及ぼす影響—解離性体験尺度 DES- II との関係— 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I, **64**,

171-178.

林もも子 (1988). 探索的研究方法：多数事例報告データによる仮説探索—エンカウンター・グループにおけるコ・ファシリテーター関係の研究に基づく一考察— 人間性心理学研究, **5**, 44-60.

Hawton, K., Rodham, K., & Evans, E. (2006). *By Their Own Young Hand Deliberate Self-Harm and Suicidal Ideas in Adolescents*. Jessica Kingsley Publishers. (ホートン, K., ロドハム, K., & エヴァンス, E 松本 俊彦・河西 千秋・今村扶美・小林桜児・阿瀬川孝治・勝又陽太郎・杉浦寛奈・中川牧子・須田顕・持田恵美 (訳) (2008). 自傷と自殺 金剛出版)

清瀧裕子 (2008). 青年期における攻撃行動および自傷行為について 対人的信頼感, アレキシサイミア傾向, Locus of Control との関連から心理臨床学研究, **26**, 615-624.

Klonsky, E.D. & Muehlenkamp, J.J. (2007). Self-Injury: A Research Review for the Practitioner. *Journal of clinical psychology*, **63**, 1045-1056.

Martin, J., Cloutier, F.P., Levesque, C., Bureau, J-F., Lafontaine, M.-F., & Nixon, M.K. (2013). Psychometric Properties of the Functions and Addictive Features Scales of the Ottawa Self-Injury Inventory: A Preliminary Investigation

Using a University Samples. *Psychological Assessment*, **10**, 1-6

松本俊彦・阿瀬川孝治・伊丹昭・竹島正 (2008). 自己切傷患者における致死的な「故意に自分を傷つける行為」のリスク要因：3年間の追跡調査 精神神経学雑誌, **110**, 475-487.

松本俊彦 (2009). 自傷行為の理解と援助「故意に自分を害する」若者たち 日本評論社.

岡田斉 (2002). 自傷行為に関する質問紙作成の試み 人間科学研究 文教大学人間科学部, **24**, 79-95.

Owens, D., Horrocks, J. & House, A. (2002). Fatal and non-fatal repetition of self-harm: Systematic review. *British Journal of Psychiatry*, **181**, 193-199.

Walsh, B.W. (2005). *Treating Self-Injury□A Practical Guide*. Guilford Press. (ウォルシュ, B.W. 松本 俊彦・山口亜希子・小林桜児 (訳) (2007). 自傷行為治療ガイド 金剛出版)

山口亜希子・松本俊彦・近藤智津恵・小田原俊成・竹内直樹・小阪憲司・澤田元 (2004). 大学生における自傷行為の経験率 精神医学, **45**, 473-479.

2015. 9. 28 受稿, 2015. 11. 15 受理